幼年繪雜誌に就て

東京女子高等師範學校講師　倉橋惣三

吾人の希望として、幼年繪雜誌は、學校教育の、殊にその教授方面の補助手段としてよりは情緒教育を主としたる、遊具性のものでありたいといふのである。繪雜誌が殊にその畫家を選び、色彩印刷に意を用ゐて、所謂藝術的力によつて幼兒に接せんとするのは、此の方面に於て最も有力なる所以であると思ふのである。

多數の幼年雜誌が發行せられて居るといふことは、自からその選擇の必要が多くなるわけであつて、然かもこの選擇は必ず父母のなすべき仕事であるのである、若し父母にして細心なる注意を拂はなかつたならば、反つて最愛の子供の爲に害を來たすといふやうなことがないとも限らぬ。殊に繪雜誌、讀物が必要であると言つても、その分量の關係は大いに注意を要することであつて、今日の如き雜多なる繪雜誌を、不規則に亂讀するといふが如き風のあるに對しては父兄は最も意を用ゐなければならぬ、更にかくの如き繪雜誌類は社會教育の性質を帶びて居るものであるから、これが監督に關しては、社會が適當なる注意と方法とを心掛けなければならぬ。それには幼年繪雜誌の監査機關を設くる、といふやうなことも必要であらうが、又社會的批評の力を以て、不良なる種類のものゝ存在を爲し得ざるやうに、嚴格なる批判を加へることも、最も必要であらうと思ふ。

之を要するに幼年繪雜誌の眞面目なる意義と、之がために力をつくすの必要と極めて亂雜なる實情との混亂してゐるのが今日の狀態ではないかと思はれる。（『教育時論』第一一二四號）